

いのちを結ぶ

# つながり力

社会に出るのが怖い、人と接することができない  
人と人との関係性が今、もろくなっている。  
だが人々は、つながりを求めているわけではない。  
新しい時代の、新しいつながりを模索する人々のために、  
ひとりの仏教家が続けてきた営為を探り、  
「つながり力」の大切さを改めて問うてみた。



僧侶

## 秋田光彦

Misubiko Akita

大阪市天王寺区の寺町に、ひととき異彩を放つ建物がある。浄土宗大蓮寺の塔頭・應典院である。コンクリート打ちっぱなしの前衛的な建物の中に入ると、本堂では舞台設営の真つ最中だった。若者たちに演劇をはじめさまざまな活動の場を提供しているのは、大蓮寺と應典院の住職を兼ねる秋田光彦氏である。秋田氏は寺という「場」を生かし、地域の中で人々との新たなつながりを生み出すさまざまな活動を模索している。東京の大学に進み、二〇代は映像ビジネスにも飛び込んだ異色の僧侶は、社会とのつながりを見つづけられずに立ちすくむ若者たちに、新しいつながり力を提示しようとする。NPO活動とも結びつく地域の活力を引き出し、やがては地域で「死」を受け止めていくビハラ（ホスピス）を作りたいと語る一仏教家の言葉に耳を傾けてみよう。

取材・文 千葉 望 写真 栗原克己

## 仏教の「縁起」「こそつながり力

大蓮寺さんは、創設四五〇年の古刹でいらつしゃるか。ところがその塔頭である應典院は見た目も内容も新しい「イベント寺」として知られています。應典院本堂は演劇もできる造りになっていて、たくさんの人々が集まるそうですね。

秋田 應典院には年間三万人ぐらいの若者たちが集まっています。今日も夜の舞台に備えて朝から準備

をしている若者たちがいます。彼らの多くは正業についていないんですよ。言い換えれば、私は年間三万人のフリーターと付き合っている。ときどき芝居を見たり、一緒に酒を飲んだりしながら若い人たちの生の声を聞いていますが、酒が入ればおのずと将来の不安について話さようになります。二〇代後半になってもなお、次の人生のビジ

ョンが描けないしんどさを、生々しく聞くことが多いですね。

いまの若者たちは非常に社会参加を恐れていて、社会の前で関係を断絶してしまっているところがあります。ニートはその典型。私は若年者の雇用問題にもかかわっていて、制度についての議論にも参加していますが、それ以前に、なぜ彼らが社会というものと上手につながれないのかという根底の部分を、もういちど社会全体が見つめなければならぬ解決には結びつかないはずです。

私は仏教者としてずっと考えてきたことがあります。仏教の教えの根本にあるのは「縁起」です。あらゆる事象はそれぞれにおいて必ずかわり合いを持っています。無関係なものはこの世にひとつもない。これを翻訳すれば「つながり」なんです。だから私たち仏教者の使命、寺の使命は縁起の社会を育て、つながりの力をよくむことに尽きるのです。

そのことを現実社会とどのように結び付けるかは非常にむずか

しい問題ですね。

秋田 若者たちは社会に漠然とした不安を抱いています。つながりたいのにつながりきれない。今は価値観が多様化していて、一番時代に敏感な若者たちのセンスや感覚に社会が対応できなくなっている気がします。雇用の問題などはその一例です。もちろん行政や学校だって頑張っていますよ。でも私は若者を育てたり社会を広くんだりするには、行政や学校だけが頑張ってもだめだと思つてます。もっといろんな人たちが公を語ることが大事なんです。日本では「公」官になっちゃっている。

でも九五年に阪神淡路大震災、オウム真理教事件と大きな出来事が続きました。私にとっても人生の転機となった年です。そのとき初めてボランティアという言葉がまっとうな日本語として流通し始めた。それから一〇年。だんだんと市民が普通の日常語で公を語る時代にシフトしつつあると思うんですね。サービス業がどれだけ発達しても、それはつながりではなくあくまでもビジネス。本当のつながりがどこにあるのか探ってい

寺院とは思えない斬新なデザインの應典院。ここには演劇のできる本堂があり、準備作業のできる部屋や厨房施設もそろえて若者をバックアップしている。



くためには、公を語り合うこと、公を分かち合うことが必要なんです。その場としてNPOがあり、私の場合は芸術があると思っています。

**應典院で活動していた若者たちは、巣立ってからどうなっていくのでしょうか。**

**秋田** 私は彼らに起業しろとか、ひとりで生きていけと言っんです。もちろん会社に入ることが悪いとは思いませんが、将来立ち行かなくなる可能性もあると。若い人たちはみんなそれを敏感

に感じ取っていますよ。その代わり新しい仕事を自分でどんどん起こしていけばいい。大きなお金儲けはできませんが、人に喜んでもらい、社会に役立てれば、それが君たちの生きがいになるというメッセージは発信しているつもりです。

**普通の会社勤めでは、ここで培ってきたものとの落差を感じながら生きていくことになるんじゃないか。**

**秋田** 私もサラリーマン経験がありますので、日本の企業社会のよさも承知しているつもりですが、仕事の数が減ってきている現在、若い人たちがあふれていかざるを得ないことは確かです。彼らの持ち場を保障していくことは国全体の課題でしょうね。今までの序列の中で狭き門を目指せというのは無理ですよ。また今では、以前ならニッチと言われていたようなところや、個人的な関係性をマーケット化する経済も生まれていると思うのです。医療や福祉、教育など、全部そうですね。人と人とのつながりですから。

## 地域こそが新しい社会を生み出す

これからは、地域が新しい社会を作る重要なファクターになるとお考えですか。

**秋田** 私はそう思っています。今日本の地域はすごく衰弱しているでしょう。一方お寺というのはどうしても地域に根づいていますから、地域から逃れられない。そこに生きる人たちが力を合わせて地域をよくしていけば、ダイナミックな動きが生まれるはず。その動きの担い手は若者だと思っています。でも、つながりをきちんとした形や経験として伝えるには教育が必要です。うちがいろいろな大学と提携しているのはそういう意味もあるんです。

ただし、町内会などの従来型の地域はもう崩れていますね。インターネット時代にそういう地域では維持できないでしょう。それを再生するためには、これまでの地縁組織を活用するよりも新しい血を導入したほうがいい。その際のテーマは公の課題

に対し、どんな「ミッション」を持つかです。

たとえばこのあたりにはどんなマンションが建設されています。しかしこれらのマンションも二〇年後にはスラム化する可能性がある。そのときに地域との関係性がなければ、犯罪や事故の温床となりかねない。これは問題だということで、京都大学の先生方とNPOを作って活動を始めました。このように、住環境の問題や地域の教育問題など、誰もが共有している課題をみんなで分かち合うためにも、どんどん外から来た人に入って



(上) 本堂で行われたシンポジウムの一コマ。ご本尊である阿彌陀仏が照覧される場で、真摯な議論が積み重ねられていく。(下) 若者たちが手作りした劇が上演される。写真提供：應典院

もらっています。

かつてお寺が担った役割も同じ。ドラッカーは『非営利組織の経営』という著作で、「世界のNPOの原点は日本の寺である」と書いています。教会の歴史より

## 寺が持つ「場」としての可能性とは

お寺にはいろいろな可能性があるわけですね。應典院さんは檀家がなく葬式をしない画期的な寺ですが、これも新しい可能性の開拓ですね。

秋田 葬式をしないというところ、みなさん「それで寺なんですか？」とおっしゃる。しかし寺はもともと葬式専門だったわけじゃない。庶民にとつての葬式仏教の歴史は一〇〇年そこそこです。それより前は日本の生活文化の拠点だったのだと言つと、「へえー」と感心されます。それはお寺だけがやっていたのでではなく、市民と一緒に作り上げてきた民の公。自分たちの歴史の中にあったものなんです。その歴史を知ると、みなさんとても喜ばれますよ。

りもはるか以前に、日本の寺は民が主導した公の拠点だったのだと。たしかにいちばん初めに地域に開かれた学校は空海の作った綜芸種智院しゅうげいしゅちいんですし、江戸時代は寺子屋がブームでした。

應典院という新しい寺を建てるのに、大蓮寺の檀家さんも協力的だったとか。

秋田 はい。最初に作る際の委員にも入っていただきましたし、ご寄付もいただきました。今應典院はお寺とNPOの協働プロジェクトとしてやっていて、寺町倶楽部というNPO会員の半分は大蓮寺の檀家さんです。ふたつお寺があるからできたと言えますね。大蓮寺をこうするといつてもできなかったでしょう。

最初は警戒心を持つ人もいたでしょうね。

秋田 新しの布教をされるんじゃないかとか（笑）。理解してほしいと努力したわけではないんですが、集まってくる人達を見ていればおかしな場所ではな

いことがだんだんわかってきたんじゃないでしょうか。それから、「こんなもの、寺じゃない」とも言われたことも。そういうときは「じゃあ、寺とは何か」と切り返すんです。最初はおっかなびっくりだったのが、二年目の後半ぐらいからどつと見学が増えました。普通の劇場やホールと違う「空気」を感じてくださる方も多いです。

それはどこから生まれるものでしょう。伝統ですか。

秋田 ご本尊があつて、お地藏さんもいらつしやる。寺独特の空気がもたらすものでしょうね。何か超越的なものに見守られているという感覚は大事です。アダム・スミスが著作の中で「公正無私なオプザーバー」という言葉を使っていますが、そのようなものですね。仏教的に言えば「おかげさまで」とか「そんなことをやつたらご先祖様に申し訳ない」という日本人の生活に溶け込んだ感性。そういうものがなくなつたときに、これからの地域を誰が審判するのか。そこにはただ法律的な判断とか金儲けの判断しか存在しなくなる。道徳や倫理を語るときに、もう一

度宗教の真つ当な部分に気づかなければいけません。

秋田さんはお寺の跡取りとしてお生まれになつたわけですが、最初から継ごうと思っていましたか？

秋田 とんでもない。猛烈に嫌でした。若い頃は人の生死を生涯にすることが許せなかった。今は全然違うんですけれどもね（笑）。それで東京の大学に進み、ぴあやアミューズに就職したんです。可能性だけを信じてモノを創造する喜びは、そこで学びましたね。その後自分で事業も起こしましたが、いろいろと挫折も経験し、大阪に戻りました。傷ついて帰ってきて、佛教大学に行きなおいしたんです。大事なことは、そのとき私が傷を負っていたということ。だからこそ感知できたものがあつたんです。やはりそれは一種の宗教体験でした。それなら寺のことを一所懸命にやつてみようと思ひました。三十一歳のときのことです。以前は仏教に反発ばかりしていましたが、今ではすごい宗教だなあと思っています。





あきた・みつひこ  
1955年大阪市生まれ。明治大学卒。情報誌『ぴあ』の編集部を経て、映画「狂い咲きサンダーロード」「アイコ16歳」などのプロデューサーとして活躍。郷里に戻り、佛教大学仏教学科に編入し僧侶となる。97年に劇場寺院・應典院を再建し、大蓮寺と兼務住職となる。99年第19回大阪まちなみ賞を受賞。保護司など公職も務める。現在はふたたび映画にも関わりを深めており、映画の脚本執筆などでも活躍中である。

寺だからこそできること、人々が心を許すことがたくさんあるんですね。大蓮寺さんは幼稚園も併設されていますが、卒園児が應典院に行くことはありますか？

秋田 いますよ。嬉しいことですね。私はこの寺が、幼児には幼稚園、若者には應典院、高齢者になつてからは大蓮寺とそろっているのがいいと思うんです。職業生活の間が抜けていますが（笑）。

## 地域に「ビハラー」を作りたい

秋田さんは、まだこれからおやりになりたいことがあるそうですね。

秋田 将来はホスピスをやりたいと思っています。仏教で言う「ビハラー」です。例えばアメリカでは相当多くの人たちが

でもこれからは、違う可能性が生まれるでしょう。二〇〇七年には団塊の世代が定年退職で地域に戻ってきます。彼らがどういう形でその後の人生を生き抜いていくのか。まだまだ時間がありますしね。日本人が今まで見落としてきた時間を、もう一度具体的な場所としてここで提供できたらいいですね。

在宅で最期を迎えるのですが、それを支えているのは家族やお医者さんだけではなく、地域の人たちなんです。特にリタイアした人たちが、自分の残された務めとして死期のお世話にかかわる。それが地域の人間とし

ての責任であり、誇りだと考えているといえます。

日本もだんだんそうならざるを得ないかもしれません。

秋田 そうなのですけれど、まず若いうちからの教育がないとむずかしいでしょう。かつてはお互い様で支えあつてきた地域の力が弱くなっている。介護保険が導入され、ビジネスの論理が加わりそこから介護バブルも生まれているといわれます。どうしたら地域の自助能力が高められるのか。私は大きな転機が二〇〇七年にくると思うんです。

私自身の問題で言えば、「ビハラー」の在宅死を支援する拠点作りを、五年ぐらいで実現したいですね。その中で人間の最期に注目し、死をひとつの起点にしながら、そこからもう一度地域や人々のつながりを再生していく動きが生まれるかもしれない。在宅死とは死を社会に顕在化させることでもあります。死を地域でまぎまぎと見つめることによって、どれだけ多くの子供たちが命について考える機会になるか。これがもっとも大

きなホスピス、ビハラーの目標になる。つまり、死をきずなしながら地域全体がつながっていくということです。

アメリカのホスピスでは、一室に芸術家のボランティアが待機しています。末期患者の方が希望すると、好きな詩を役者さんに読んでもらったり、プロの演奏家に音楽を演奏してもらうことができるんですよ。末期がんの患者だけで劇団を作つて、演劇をやるケースもあります。このように命と芸術が交流していく場が世界にはたくさんあるんです。日本では別物ですけどね。それを私の人生の中でいずれ交錯させてみたい。命と芸術は同じもので、それが宗教の持つているいちばん美しい面なのだと思います。日本にお寺は約八万あります。そのうち一%が本気でやつたら社会はきつと変えられると思っています。

寺院とは、それだけの社会基盤だということですね。本日はどうもありがとうございました。

聞き手／日本銀行情報サービス局長

湯本崇雄

つながり力  
のかたち

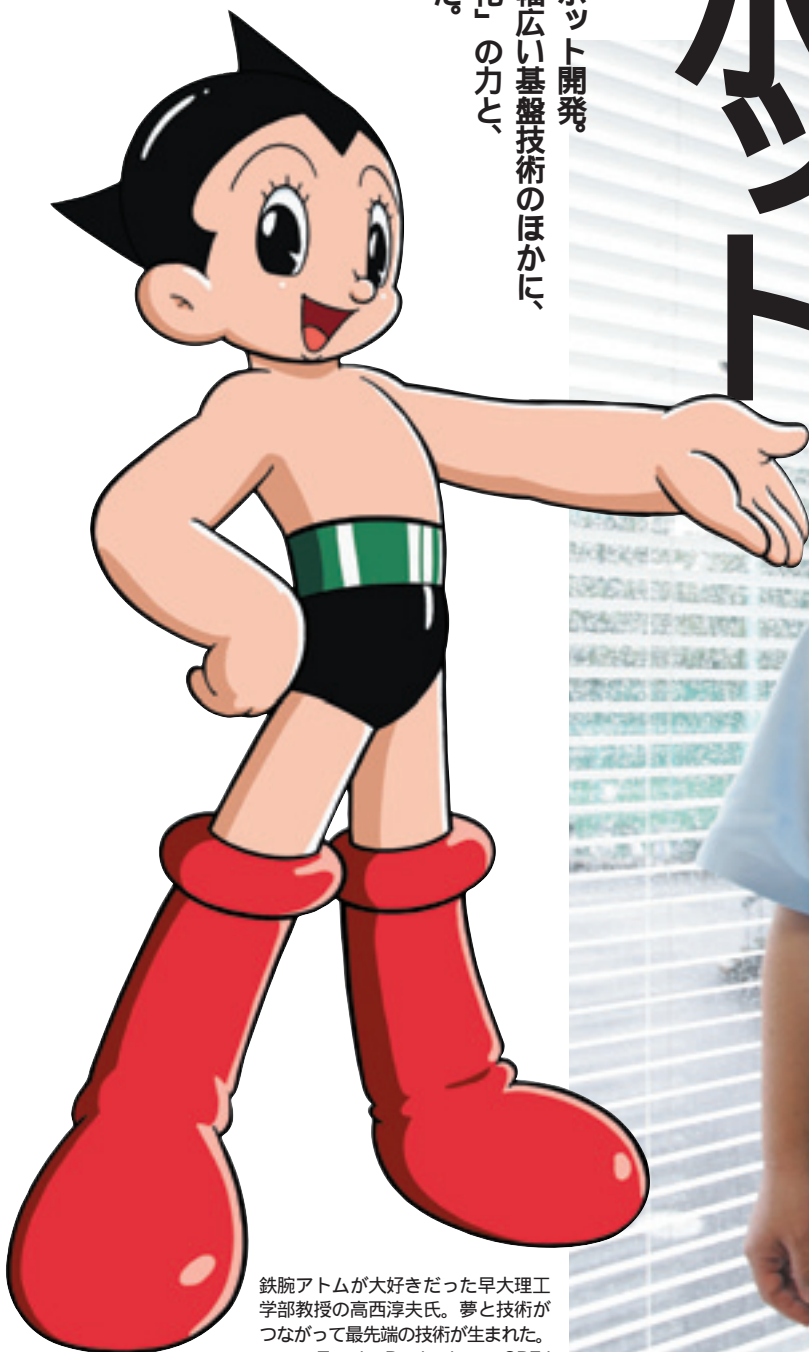
「早稲田大学理工学部高西淳夫研究室」

夢と技術がつないだ

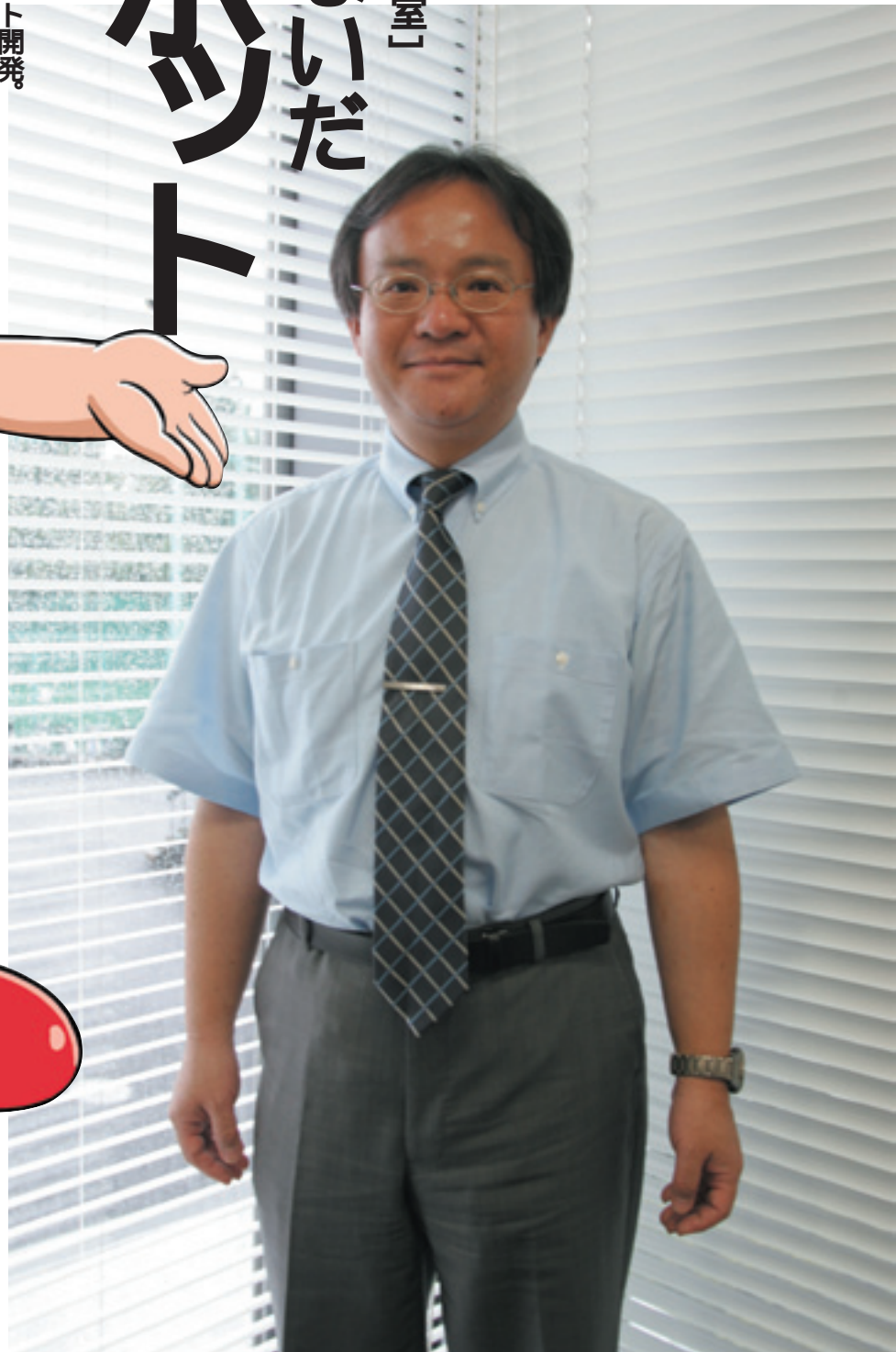
# 先端ロボット

世界のトップクラスにあるという日本のロボット開発。  
実はロボット研究を支えてきたのは日本の幅広い基盤技術のほかに、  
江戸時代にさかのぼる日本の「技術の応用化」の力と、  
分野を越えた人間どうしの結びつきにあった。

取材・文 千葉望 写真 谷山 實



鉄腕アトムが大好きだった早大理工学部教授の高西淳夫氏。夢と技術がつながって最先端の技術が生まれた。  
© Tezuka Productions・SPEJ





# 日本の多彩な技術が支えたロボット開発

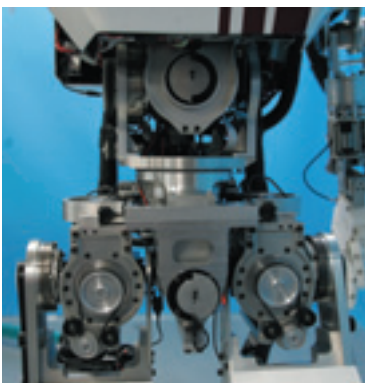
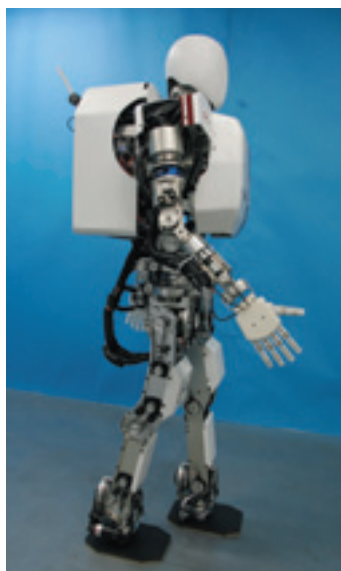
以前、民間のロボット開発技術者にこんな話を聞いた。

「欧米では人に似せて何かを作る行為は神様の領域なんです。ロボットはまた、悪にも染まる

ものだと思われています。しかし日本では、欧米と違ってロボットに対する宗教的な警戒心はありません。手塚治虫さんの『鉄腕アトム』で、ロボット＝善い友人というイメージが定着しているからです」

だとすれば、手塚氏はなんと大きな財産を私たちに遺してくれたのだらう。今、日本のロボット技術は世界のトップクラスだといわれる。

「私も子供の頃はアトムファン。実写映画も観ましたよ」と語るのは、早稲田大学理工



写真提供：早稲田大学高西淳夫研究室

学部機械工学科・ヒューマノイド研究所教授の高西淳夫氏である。高西教授は学生時代からロボット一筋に研究を続け、「人間形二足歩行ロボット」「情動表出ヒューマノイドロボット」「汎用二足ロコモータ」「人間形発話ロボット」など、多彩なロボットを開発してきた。中でも「人間形二足歩行ロボット（WABIAN-2）」は、名古屋で開かれた愛・地球博に出展され、注目を集めた。

さつそく、右胸に早稲田の校章をつけたWABIAN君と対面する。人の腰骨のような繊細な腰まわりの動き、しっかりとひざを伸ばしたスマートな歩き。

## ロボットの源流は江戸時代のからくり人形？

先端の部品を使い、それを統合させてロボットを進化させていく。いかにも時代の先端を行く、わくわくさせられるプロジエクトだが、高西教授はその根源を江戸時代に見ている。

「江戸幕府は基本的に兵器開発とか、工業振興を禁じていまし

「ロボットは非常に幅広い基盤背景分野があるわけです。たとえばセンサー、モーターとそれを支える磁石、半導体、CAD、材料など周辺技術が進歩すればロボット全体の技術も上がると間違いなく言えますね。これらの部品やソフトなどの提供・共同開発に協力してくれる日本の会社は〇社ぐらいあると思いますよ」

高西研究室の要望によつて協力企業の技術が磨かれ、それによつてさらにロボットが進歩していく。企業としては共同開発によつて、自分のところの製品がどこまで使えるか把握できるというメリットがある。

た。農業、商業とエンターテイメント分野での技術開発はOK。そのためにからくり人形などが非常に進歩したんです」



人を運べる汎用二足ロコモータ。腰部と脚部のみで自動歩行ができる。  
写真提供：早稲田大学高西淳夫研究室

江戸時代のからくり人形は工

芸品として精緻をきわめたものが多いが、技術的に見てもすばらしいのだと高西教授は言う。西洋で開発された自動人形とほとんど時期は同じ。だが平和な日本では、高度な技術が軍事に転用されなかったため技術の一般化が起きた。

「当時の有名なからくり人形師たちは本も書いていたんですよ。それもベストセラー（笑）。多賀谷環中仙という人の書いた『環中仙とからくりの原理を訓蒙鑑草』はからくりの原理を書いた物理学の教科書になりそうな本です。細川半蔵の書いた『機巧図彙』には茶運び人形、他の非常に正確な図面が書かれています。原理がわからなくても、ちゃんとからくり人形が作れるマニュアルみたいなものです。その後オランダから西洋の高度技術が入ってくると、また一般化が行われる。その繰り返し

です」

高度技術を一般化していくという行為が、日本を発展させてきたという話はとてもわかりやすい。先端技術をもったいないほどふんだんに取り入れた家電製品、ゲーム機、自動車を思い出せばよいのだから。

また高西教授は、今のロボット技術者が鉄腕アトムに憧れたように、からくり人形に親しんだ日本人はロボットに親和性が強かったのだと考えている。国や地域によって、どれだけロボットに対する考え方が違うことか。たとえばアメリカではロボットを軍事利用することもないとわれないが、ヨーロッパではなんとかそれに歯止めをかけようとする。ロボットは使いようによって悪に染まるという概念が浸透しているのである。それを高西教授は欧米の研究者たちとの交流で実感してきた。

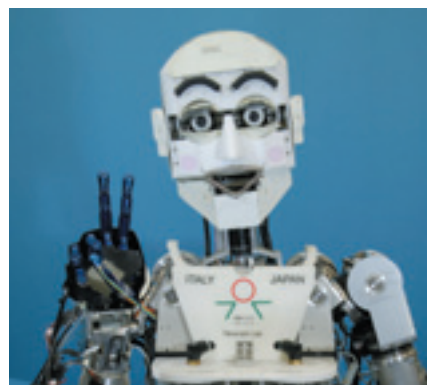
## 心理学とのつながりが生んだ情動ロボット

高西研究室が生み出したロボットのの中には、感情を表情とし

て表す「情動表出ヒューマノイドロボット」がある。驚いたり

喜んだりすると顔が微妙に変化する。同じ早稲田大学でも、文学部の心理学研究室との共同研究から生まれたという。理工学部と文学部はキャンパスも離れているし、日ごろほとんど交流はなかった。しかし高西教授は一〇年ほど前から、文学部の木村裕教授と交流を深め、心理学を本格的にロボット研究に応用し始めた。

「これが実におもしろい（笑）。心理学の論文を読んでいると、数式が出てこないんですね。われわれの分野ではありえないのですが、要するに言葉の論理でしか説明されていない。だからロボットにも応用しにくかったんです。それなら、いつそ数式を自分たちで作ればいいと思い立ちました。顔ロボットの裏で動く情動方程式を作るわけです。また、ロボットの視点から心の問題や身体の問題、人間の問題をとらえていく。身体の動きならハビリの専門家に協力してもらうとかね。そちらの知識を得ながら、式になっていないものを式にしていくことができる。



笑顔でピースサインを送るのは感情表出ロボットのEYEちゃん。怒ったり、驚いたり、いろいろな表情ができるという。写真提供：早稲田大学高西淳夫研究室

でもこれらはすべて、人のつながりがあってはじめて可能になるんですよ」

さまざまな分野の人々つながることによって、まったく新しい視点がロボット研究の現場にもたらされる。

「実は五年ほど前、高西研究室のOBと木村研究室のOGが結婚しました。これは想定外のことでした。木村先生と『これが共同プロジェクトの最大の成果』と笑ったんですよ」

なるほど、「つながり力」は若者の恋愛にも有効だったか。恋する心を情動方程式にすることができたら、いずれは「恋するロボット」だって生まれるかもしれない。



つながり力  
のかたち

# 都市に向けた発信

美しき棚田の村の「山形県最上郡大蔵村」

目が覚めるように美しい緑の棚田は地域の農と自然を守ってきた。だがその維持には高齢化の進む農家に重い負担がのしかかる。棚田を日本に住む人々共有の財産「公園」とし、懐かしい「田舎」にしようと挑戦する大蔵村を訪ねた。

取材・文 千葉望 写真 栗原克己



大蔵村の人々の丹精で、見事に穂を出した棚田。棚田作りや治水の技術は長い時間をかけて受け継がれてきた。稲を育てるだけでなく、土手の草を刈るのも大変。観光客を喜ばせる景観は人々のたゆみない努力によって維持されている。





大蔵村議会議員で四ヶ村開発協議会会長の長南喜美雄さん（右）と四ヶ村棚田保存委員会委員長の中島敏幸さん。分厚い胸は労働の賜物である。

## 棚田の価値を気づかなかった長い年月

入道雲が高く盛り上がった青空の下を、さやかに風が渡っていく。山形県大蔵村にある棚田を見渡した瞬間、言いようのない懐かしさがこみあげた。日本の田園を絵に描いたような光景が目の前に広がっているのだ。鳥海山と月山を望むここ大蔵村には、豊牧、滝の沢、沼の台、平林の四つの集落を総称した四ヶ村<sup>かむら</sup>がある。世帯数約二〇〇戸、人口わずか五〇〇人。しかしこの小さな集落の人々は、一二〇ヘクタールもの美しい棚田を守り続けてきた。

大蔵村議会議員の長南喜美雄<sup>ちやうなん</sup>さんは、全戸が加入する四ヶ村開発協議会の会長を務める。

「昭和三十年代の半ばから全戸参加の協議会が始まって、公共

事業もみんながまとまって役所と直接交渉したもんです。もともとまとまりはよかつたんですよ」

だが、棚田に対する関心は高いとはいえなかつた。というよりも、あまりにも日常的な存在で、価値に気づかなかつたのである。大蔵村は山形県の中でも北部の最上地方に位置している。標高が高いので、果樹栽培には向かない。急勾配の土地をなんとか活用しようと、先人が文字通り血のにじむような努力を続けてきた。以前は農道が整備されていなかつたので、刈り入れた何十キロもの稲の束を背負って運んだという。

四ヶ村棚田保存委員会会長の中島敏幸<sup>なかしま</sup>さんは、笑いながら言う。

「一二ヘクタールと言っても、その六割は土手なんです。土手が広いから、維持したり草を刈るだけでも大変。『なんでこんなところで稲作をやつてんの?』と思うこともしょっちゅうですよ。危ないしね。普通なら耕作

放棄して当然。この棚田が『見ていると癒される』と言われるようになるなんて、想像してなかつたですよ」

長南さんも、驚きを隠さない。

「棚田の価値がわからないまま、先祖代々のものを守ってきたというのが正直なところさ。平成十一年に棚田百選に選ばれてからも、それで観光客がくるなんて思つてもみなかつた。でもそのうち輪島で棚田サミットが開かれて、参加してみたら、本当にびっくりしたよ。そうか、棚田つてのはすごい価値があるんだなつて、改めて気づいて、今度は村役場の担当ともつとががんばつてみようかと話し合つてね。岐阜で開かれたときのサミットでは村長も一緒に参加してもら

## 大地の営みを都市に向かって開く

棚田は守りたい。だが、平地

での稲作よりもはるかに労力と技術が必要とする棚田を維持していくのは大変である。棚田を新しい財産として、観光と産業振興にも結びつけようと考えた



大蔵村産業振興課長を務める設楽靖弘<sup>せつひろ</sup>さん。村の将来を切り拓く一人だ。

い、棚田に真剣に取り組むことになつたんです」

豊牧地区は地すべり多発地区で耕作を放棄すると地すべりの危険が増えるという危機感もあった。村を案内してくれた大蔵村産業振興課の設楽靖弘<sup>せつひろ</sup>課長は、「『日本三大地すべり』なんていわれたほどひどかつたんですよ」と話す。防止のための方策は施されているものの、大雨や地震など災害に弱いことは変わらない。

のは自然の流れだつた。

東北芸術工科大学教授で舞踏家の森繁哉氏（大蔵村出身）は、芸術を柱として大地に根づくことを願つて活動を続けてきた。今年は棚田を持つ新潟県十日町



# いのちを結ぶ つながり力

東北芸術工科大学東北文化研究センター教授で舞踏家の森繁哉さん。大蔵村出身。大地に根ざした活動を続ける。写真は棚田での舞踏の一コマ。写真提供：森繁哉氏



市で開かれた「大地の芸術祭」に参加し、棚田劇場で舞踏を披露した。

「農村は、これまで守ってきた技や営みを開いていく時代に入ったと思います。大蔵村のもつゆるやかな時間の流れや空間は、実は営み続けるには、果敢な挑みの姿勢を必要とするもの。これ

## 七〇本のろうそくが揺れる新たな祭り

大蔵村では棚田を中心に村の活性化を図ろうと、さまざまな組織を作り、全戸に参加してもらった。味来館運営委員会（「ふるさと味来館」は郷土料理伝承施設として地域の活動の場となっている。手打ち蕎麦や郷土料理を味わえる）、元気な四ヶ村づくり推進委員会、そして棚田保存委員会。ただ棚田を見に来てもらうだけでなく、自然や農業に親しんでもらおうとワーキ

からは中だけで完結するのではなく、大切な地域社会の豊かさを評価し、伝え、外部の人にリピーターとして参加してもらうことが重要です。今は農村が試されているんですよ。その一方で行政も、棚田を『日本の公園』として、国民みんなで守るしくみを作ってもいいと思います」

たしかに美しいと喜んでいるだけではいけない。地元に負担を強いることなく、分け持つことの大切さを考えなければならぬまい。

ングホリデーを実施する準備が進んでいる。田の作業のほか、民有林等の間伐や枝打ちなどもやってもらう。営農希望者への支援も行う予定だという。このような活動を通じて、村と都会とのつながりを深める夢を村民は抱いている。

「大蔵村の近くには肘折温泉などもありますし、観光地には事欠きません」と設楽課長も胸を張る。棚田

だけではない、まわりには美しいブナやミズナラの森があり、沼がある。人の姿とて見えない男沼には、ルリイトトンボが美しいペーパーミントブルーの姿で飛び交っていた。冬は豪雪地帯となるが、雪景色もまた素晴らしいのだ。

最近懐かしい「田舎」を持たない人も多い。ワーキングホリデーで地元農家に分宿し、人と人の結びつきが強まれば、血のつながらない「田舎」を得られるのではないだろうか。

「子供たちなんか来てくれたらみんな大喜び。自分の孫みたいにかわいがるさあ」（長南さん）取材につかかった八月七日は、日が暮れてから「ほたる火祭り」（平成十六年開始）が行われることになっていた。棚田のあぜ道に、ペットボトルを活用して作られたろうそくの行灯が立てられるのである。その数、およそ七〇〇。ヒグラシの声に送られて宿を出て棚田に向かうと、味来館では村のおかあさんたちが遠来の客たちをもてなそうと、焼きむすびや漬物を用意してい

てくれた。棚田でとれた米や野菜がおいしい。このホスピタリティも魅力である。

日が暮れかかると、ひとつ、またひとつと灯がともる。その幻想的な美しさ。県内はもとより、全国から訪れた観光客がため息をつく。中には百選に選ばれた棚田を追いかける写真マニアもいる。風に揺れる灯りは、まさに蛍のよう。闇の中に稲田の香りが漂い、繊細な虫の声が心を静めてくれる。美しい棚田の村から発信された願いを受けとめるのは、今度は都会人の役目である。



平成17年8月7日に行われた四ヶ村の「ほたる火祭り」。ペットボトルに灯されたろうそくが幻想的な美を創り出した。